

水辺に立つ巨人とは誰か

浅野 春男

HARUO ASANO

VOICE'S CRITICAL EYES

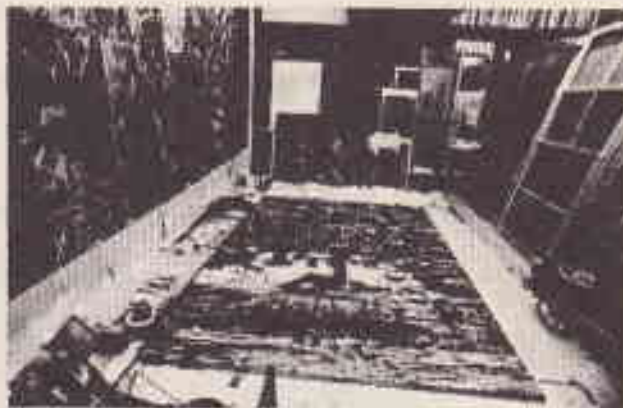
精神の深部にある闇を意識しないで生きていくことは、おそらく容易なことだろう。出来れば明るく、軽やかに、毎日をご過ごしていきたい、という想いは誰にもあろう。

絵の展覧会に私たちが求めるものは、一体何だろうか。もちろん華麗に咲き乱れるカトレアや蘭の花々を愛でるように、絢爛たる色彩のシンフォニーを肉眼で味わう類の感覚の喜びは、私たちの求めて止まぬものである。だが、ときには、そうした調和的な造形の切れ目に落ち込んでしまうことがある。そのときに、私たちは、今まで自分が見たことのない世界の水際に立っていることに気づいて、戸惑う。これは一体何なのか。ここに描きとめられ、あるいは暗示されている世界とは何か。

先般(1992.3/16~28)、面廊沖縄(ギャラリー・ワークⅡ)で開かれた個展によって、私は初めて山城見信の作品を見た。というよりも、自身の精神の内部をのぞきこみ、その奥底にある不定形の闇を見失った人の畏れおののくような近況報告を、私もまた、自身の精神の内部からのささやきの如くして、聞くという経験を得た。ささやきは、面廊におかれた作品という外部からと、また私自身の精神の内部からと同時に、幻聴のように、この世ならぬ人のつぶやきのように聞こえてきた。キミノ意識セヌコノ闇ヲ知ッテイルカ。

キミノ意識セヌコノ闇ヲ知ッテイルカ。

19世紀のフランスでいえば、黒はきわめてお洒落な色彩であった。それはボードレールのダンディズムの色であり、また絶妙の色彩画家マネが使いこなした煌めく色彩、つややかに、なまめかしい、女の肌のように実質をもった色であった。



山城見信のアトリエ

この黒が印象派によって排除されていく経緯について、ここで述べるゆとりはない。私がいいたいの、山城が先般の個展で用いていた黒は、こうした美術史上の文脈を大きく逸脱した色彩だということである。彼の作品には、夜の闇のなかに砕け散った珊瑚の明滅のように、夢のなかに揺曳する宇宙線のように、私たちの視覚にたいして外部から訪れる光線の輝きの描写といえるピンクや青、オレンジ色の姿が定着されている。それらはいわば描写された外部の色彩である。だが、黒はちがう。それは人間の心の底に潜む

闇がそのまま姿を現したような、非絵画的な黒なのではあるまいか。

先般の個展では、「水辺のきよじんシリーズ」と名づけられた作品が4点出品されていた。自身の精神の最深部にまで下降してゆき、そこからの苦しい現場報告を送ってくる山城は、いま眼の前の巨大な闇に対峙している。闇のなかで、全身の感覚を最大限に發揮して、必死になって自己の立つべき場所を定めようとしている。

山城はときどき、ほとんど詩のレヴェルに達している散文を走り書きするようだ。個展会場で会った彼はそれらのひとつを私に見せてくれた。そこには、絵に描かれたのと同じ世界が、言葉によって、自然と人間とを遠隔する汎心論的なリズムのうちに

捉えられていて、私を感動させた。その散文の最後の方に、彼は「木曜日、私は別人になる。空間恐怖症になる。私は私の敵になる」と書いている。

心の闇を見詰めるのは困難な道だ。だが、山城はその道を選んだ。

闇のなかに身体をすっぽり捉えられてしまつては、もはや何物も見ることにはできない。闇を直視すること、闇を対象化すること、そのときこそ水辺に立つ巨人の姿を私たちははっきりと見ることができにちがいない。

(あさのはるお・沖縄県立芸大助教授)

國場組グループ

國和會

会長 國場 幸昇



ひとにいつも新しく—生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270

OKINAWA

Open Air Exhibition 1992

- ◎森 千香子
- ◎田原 幸浩
- ◎高村 牧子
- ◎沢田 悦子
- ◎仲里 安弘
- ◎荒木 隆久
- ◎近藤 渉
- ◎新里 義和
- ◎玉城 哲人
- ◎多和田 真人
- ◎西沢 むう
- ◎森 英之
- ◎与那覇大智
- ◎メリサ・ラグリック



去る7月3日～5日まで、玉城村の新原ビーチで沖縄側7人、東京側7人、オーストラリア1人の計15人の若い芸術家達(25才～33才)が屋外美術交流展を開いた。今回は、その作家達にインタビューを試みた。

開催

QV 今回の展示会のきっかけ、ねらいを聞かせて下さい。

森(千) 前回のグループ展は神奈川県民ホールでやりました。1回、既成の空間でやったんで、今度は野外展をやるんじゃないかということです。メンバーの高村が沖縄に地縁があって、多少作家も知っているということもあつたんです。

ねらいについてはグループ展として続ける場合、一番やりたくなかったのは、毎年ただのイベントで同じことの繰り返し団体展的なノリですね。ほとんど個展の経験もないような人達が集まって、ゼロの所からいきなり5や6の上がりキープしていきたいと。常に発展していきたいというのがあるんです。もともと、メンバーが集まる基になつたのが牛窓国際芸術祭です。しかし、その展示会に参加した側は言いたいこともたくさんあって、身内でグシグシと文句を言っているのは作家としてはネガティブな行動と思つたわけです。それを批判するのではなくて、それじゃあ展示会をどう改善していけるのか、ということを実際に行ってみようかというのが、今回の野外展なわけです。

QV ビーチでやることの、ねらいもあ

つたんでしょうか。

森(千) 最初の展示会では、神奈川県民ホールが抽選に当たって多少インフォメーションもしたんです。でも、なかなか観に来てくれないんですね。多少地の利が悪い所もあつたんですが、現実問題として我々全員、名前だけで観客の動員をできるほどのネームバリューがない。それでも観てもらいたいと考えたときに、観に来てくれないのなら無理やり観せてしまおうということです。囲われた占有のビーチではなくて、一般のビーチでやってみようじゃないかということになりました。

ら、いる所へ行けばいいということで炎天下の海にしました。

参加

QV 展示会が終わって今の気持ちを聞かせて下さい。

高村 自分がなぜ作品をつくっているかという、自分が観たいものをつくりたいわけです。つまり自分の好きな作品と海があるということですね。沖縄で世界史上初、泳ぎながら観れる展示会が出来たんで、うれしかったです。



参加メンバー

それと社会との交流ですね。廣く仰々しく聞こえるんですが、私達も、勿論美術で食べている人間はいません。つまり美術家としての面は社会の中では隠れちゃっているのです。もう少し社会と自分のやっている美術の仕事というのをリンクさせないと、いけないとおもうわけです。現代美術という以上、現代の人々と心が繋がってないと現代の美術とは言わない。だから社会に訴えかけて行きたい。その方法のひとつとして人が来ないのな

田原 僕はグループ展は初めて。一番、目立とうと結構ケンカ腹で作品をつくりました。今おもうと、もつと出来たな、と。大きい作品をつくったら廣くおもしろい。面倒臭いこともやったら、いいのが出来る、それが実感できてうれしかったですね。

多和田 僕もこういうのに参加するのは初めてです。たまたまこの話がきて、参加していい経験をしたとおもいます。海でやったことにも非常に満足です。作品



パームヒルズゴルフリゾート



ヒューマンテック
高尾コーポレーション

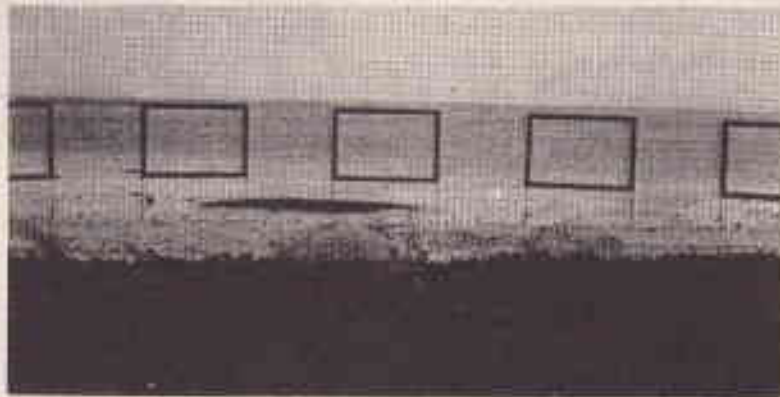
代表取締役社長 高倉 幸一

〒900 沖縄県那覇市後志1-2-1 Tel.098-861-7621

“専門画材の店”
CULTURE PLAZA
株式会社 **みつや書店**
〒902 沖縄県那覇市豊原1-1-3 ☎(098)863-1650

も自分のなかでは、いいものが出来たなとおもってます。今回の展示は、海をあまり意識していません。

沢田 正直言って、始める前は凄くプレッシャーがありました。制作するのは家のなかですから大きさにも限度があります。これだけ広い海で展示するのですから目立たないだろうと焦ってました。そのうち、大きさじゃなくて雰囲気を出し



中野大智作品

てしまおうとおもったら、後は迷いがなくなりました。

与那覇 今回初めて、インスタレーションというのをやりました。強引に平面でも悪くなかった筈なんです。僕自身にとってのタブローは、天井があって白い壁に囲まれたなかに絵がぼつんとあるのが理想。屋外となるとその前提が崩れてしまうことがある。この展示会の話があった最初から平面を出すのはやめようとおもってました。

アイデアそのものは非常に早く決まって、そういった意味では発想から制作までは一直線にいった。ただタブローだとアトリエで完成して、搬入、飾り付けになるんですが、そこで必ず制作していた時とのギャップがいつもある。必ずそこで落ち込んでというリアクションが初めにあって、それを頼りに次の制作に進むということがあるんです。今回はそういうギャップというのがよく分からないまま展覧会が終わってしまった。というのは最終日まで設置とか制作をコチョコチョやってしまっ、作品を客観的に観るまで行かないままに終わってしまったことを非常に悔やんでいます。

森(英) 制作自体は作業的に簡単にしてしまったんで3時間位で終わってしまった。それでよしとしてしまったんです。

僕もふだんタブローをやってまして、今回まったく別の方向でやったんで自分にとって本当に作品なのかというのは、まだ自分で理解は出来てません。

宮城 私は広報の仕事でお手伝いしました。今回、沖縄の景色のなかでのびのびとやれて、良かったとおもいます。沖縄の人たちの気持ちのやさしさに、ずいぶん助けてもらって、展示会もできたんだ

など、感じています。

西澤 昔、海に行って、青い光の道みたいなのを見たことがありました。水平線と空のそこから「スーッ」と自分の目の前に透明なだけドエメラルドグリーンに近い色が見えました。それが自分の目の前に延びてきて、それをうまく説明は出来ないんですけど、自分にとっては意味があるんですね。

そのことをしばらく忘れていたんですが、今回、沖縄に行くと決めた時、それをおもい出してみようと。こっちにきて、それを匂いとして体感出来ました。作品で表現できたかと言うと、よく分からない。でも、それが嬉しかったことのひとつなんです。

メリサ 今回、パフォーマンスが海の前でできると聞いて凄く嬉しかった。表現については、いろいろ迷ったんだけど、いい勉強になった。今回の新しい情報を、身体の中にもって帰ります。

近藤 自分の作品は、やっぱりまだ主観的な部分が凄く強いんですね。口下手でなかなか人とうまくコミュニケーションできなくて、その部分を助けてくれる手段になればというおもいもあります。なるべく自分をストレートに出してしまえるようなものになりたいとおもって作りました。まだ学生で、与えられた彫刻家

をめざす美術のオーソドックスな教育という部分に浸っているわけです。それを自分でどう消化していくかということを考えています。

彫刻を勉強しているものの原点に帰って一番シンプルな展示をして、それが溶け込めるかということ、初めて行く土地で見たいなどおもってました。作品が風景におだててもらって、よく見えた気がしています。いい経験をさせてもらいました。

関口 ビーチというと、凄く健康的なイメージがあるからスポーツをモチーフとして取り入れてみようかと。そこで、なぜ野球がでたかと言われると困るんですが、自分は石のなかを通して物を見れる作品というのを今までつくってきたんです。やっぱり、スポーツの視線には鋭いものがあるとおもいます。特に野球ですね。

周りが風景だから、石を通して見る風景と、自分が実際にいて見る風景との違いはどんなもんだらうか、そういうことを考えて今回、作品をつくりました。

仲里 現代美術というのは、現在生きている人達の社会性をどういう風に自分で見つめているのか、問い直すのか、というのをひとつの作品にしていくという活動なんですね。

そのことに関連して、パイプに対する



近藤作品

自分のコンセプトをもっていました。現地で視察して、下調べをして、観る人に

ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店



南西空調設備株式会社

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(098)834-7831(代) FAX(098)834-5348

地元のビールが断然うまい
最も新鮮

オリオンビール

どの位のインパクトを与えられるかというの、かなり意識しました。素材について、人それぞれが自分を問直す機会になればと。ただ作品を観るんじゃなくて、自分の生活を振り返ってみるのいい機会になればとおもいました。

新里 沖縄には、御嶽という所があります。まるっきり自然の状態の広場で目印に石などが置いてあるだけで。その場所の持っている力をうまく利用しているところがある。それで自分の作品の場の雰囲気や空間などで、インスタレーションして作りだせたらということをやっています。

社会との関わりで言うと、都会のストリートで物をつくってアピールした方がいろいろできたんじゃないかという印象も持ちました。

玉城 今回、漂流物を使った作品をやりました。海での展示会なので漂流物を使うのはイヤだったんだけど、表現したいことはそれなんだからいいかなとおもって。それから今回、金網で空間を使ったんだけど、自分の周りを囲っているというのは小さい頃から意識してるんですね。

直接結びつかどうかは分からないん



新里 千

ですが、沖縄は米軍の基地があつて、金網を通して見える緑の芝生の向こうの世界が美しいとおもって、そういう所で暮らしたいなという願望がありました。

ちょっと前にタイムスホールでインスタレーションをやった時に、リサイクルアーティストという名前がついたんで、ちょっとイヤだなとおもったんですね。ただ展開としてはゴム草履だけにこだわらないで、いろんな形で表現したいなとおもっています。

荒木 今回、沖縄で展示するというところでちょっと困ったんですが、初めはそんななかでもつような作品をつくりたいなど。結局はどれだけ溶け込めるか、自然にできるかというのを課題にしました。そういう点では結構やれたと嬉しくおもっています。

森(千) やはり行き当たりばったりではなくにも出来ない。最初、新原ビーチの他に候補地として瀬底島ビーチがあつて、そこを見てしまったから、どうしてもそのイメージが拭いきれなかった。東京近郊に住んでいる人間としてつくられた沖縄のイメージにとっても近かった。それが新原に移った時に自分の頭をシフト出来なかった。いわゆる真っ平らな白い砂が遠浅にいつている場所ということですか作品を考えられなかったということです。失敗の原因は最大そこにあつたんじゃないか。

社会と作家

GV 社会と作品、或いは社会と作家個人という関係性が、はっきり自分はどうかということを感じてない気がします。

何かちよつとものたりない気がしますが、先程、森さんが社会と自分のやっている美術の仕事というのをリンクさせて社会に訴えかけていきたいというねらいがあつたということですが、そこら辺を聞きたいですが。

高村 芸術家というのは生産的な商売ではないから非社会的なものであるという部分があるとおもうんです。一番大切な尊敬されるべき職業は農業のような絶対に生きていくのに必要なものとおも

うんですけど、そう考えた時に芸術というのは何も意味がないものなのか、お腹が膨れないから要らないのかと考えると



新里 千

そうではないんですね。

芸術というのがあつて、人間生活やごはんがおいしく感じるという風になるとおもうんですね。でも芸術というのはほつといて進歩するものではないから、それを専門的に作品をつくっていく人が必要だとおもうんです。そうするとそれを支える人というのが必要になってくるわけですね。お腹が膨れないものにはお金が貰えないのであつては芸術をやる人がいなくなってしまうということを考えてるとスポンサーが出て来て、それに支えられてやってられる、社会から受け入れられるものは受け入れてしまつて、社会の方からはある意味では受け入れられたことになるわけですね。そう考えると、それが社会の為になる芸術じゃなくてはいけなくて個人的にはおもっています。すると、どうやって社会に出していくかということが一番ですね。そう考えると限られた人しか観ないんでは、社会には出せない。だからこれだけ沢山のスポンサーが取れたというのは、それだけ沢山の人が期待をされているんだな、とおもいます。いい作品をつくっていくという恩返しをしていかなきゃいけないとおもう。**田原** 僕はおかしいなとおもう。農業をやりたい人はやつたらいいし、自分が好きで作品をつくっているんだから支えがなくてもつくっていく位の気概がなかったら絶対いいのができない。人に支えて貰うというのは有り難いことだし、感謝しないといけないんだけど、支えられな



日本セメント沖縄地区総代理店

株式会社 **金城キク商会**

本社 那覇市西1丁目1番28号 電話(098)866-1101(代表)
中部支店 沖縄市松本5丁目12-1 電話(098)937-0404(代表)

* 額縁の専門店 *

合資会社 **前田額装商会**

〒900 那覇市松尾2-7-29 電話(098)867-4811 FAX(098)861-0367

いと芸術は無くなるというはおかしな話で、支えて貰わなくても『自分はやりたからやっているんだよ』という風にしないと、実際問題やっていけないとおもう。

じゃあ、どうして社会的に芸術作品と言われるような物が必要なのかといえ、人間はひとりでは生きていけないんだから、いろんな人とコミュニケーションして生きているんだけど、そのなかで自分自身の存在感とか、小さい頃から培ってきたものなんかを、そのままストレートに出していきにくい部分もある。



仲理安作品

そういうものを言葉や行動に表して生きていくのではなくて、作品にして表現した方がいいことって、あるとおもうんです。それを観て共感する人もいるだろうし、普段表に出てこない人間の一面を見て美しいとおもったり、恐いとおもったりするんだろうなとおもうんです。

そういう所で作品は成立するものであって、勿論スポンサーもいてくれて、とても助かっているんですが、それはそれで、やっぱり作家は作品で語らないといけないとおもいます。

近藤 結局、芸術とは何だだろうと言うと、芸術とか非生産的とか呼ばれるものは椅子の4本目の脚によく例えられますね。物理的に椅子は2本脚では立ちにくいけど、3本あればものは立ちます。しかし、4本、5本あればもっと安定することで芸術があればもう少し楽になれる。そうやって自分も関わっていきたいとおもいます。もし、わかりにくいのであれ

ば提示して、接点を求めてつながっていかなければ、やっぱり僕らは作業できない。

森(千) 現在は、18世紀19世紀の王侯貴族が芸術家やスポーツ選手を丸抱えして生活まで面倒みるという社会のシステムは崩れているんですね。現実を考えて学校を出た後、普通の社会人として受け入れられるだけでもたいへんなのに、美術家だけで食べていくというのは、もっとたいへんです。作品のコンセプトとともに食べていくということも考えなくっちゃいけない。希望があるだけで、全員がスポンサーがつくわけでもない。とにかく、どんな厳しい状況においても作家として成立していかなければならない。それは作家個人の問題として、当然なんですけど。学校を卒業して4、5年はいいんですが、現実的な問題として、結婚して家族が出来たりとかありますよね。多少収入は不安定だけど、多少時間がとれて制作ができる人もいるとおもいます。でもその状態を40歳50歳までは現実的には続けられないと思うんです。そういう時に広義に支えてもらう、精神的に支えてもらうということ。そして、こういう展示会にスポンサーにお金を出して支えてもらうというのは、甘えるという意味ではなくて、支えてもらうということだとおもいます。それも、ひとつの社会交流じゃないかなと。



森千作品

展開

GV これからの展開について、聞きたいんですが。

新里 今回の展示会は、ひとつの場所に押し込められた感じがしないでもないです。沖縄は狭いですから、いろんな場所を使って、それぞれ自分の表現をするというのも、おもしろかったんじゃないか

と。
森(千) 押し込めると感じるか、一緒にやると感じるかは作家それぞれでそれに関しては私の意見は決しておしつけることは出来ない。それが沖縄と東京の感覚の違いかもしれないですけど。でも、それではひとつのグループ展としては成立しえないとおもいます。するとすれば物凄い企画力がありますね。今回ののは、今の私達にできる最大限の企画だとおもいます。確かに企画はおもしろいです。でも具体的にもっとお金を使った広告宣伝をしたりということをしていかないと、成立しえないじゃないかというのが、次回へのつなぎですね。

与那覇 実際、正直言って今回の展示会は森さんたち、東京の人たちの力でやれたんですね。沖縄は、野外展にとってもいい場所にもかかわらず、沖縄の作家は積極的じゃないんですね。これからは沖縄の人だけで、どのくらいの展示会がやれるかというのも頑張ってみたいですね
森(千) 与那覇さんの意見で言えば、今回、東京のやり方を強要したんじゃないかと若干、反省していますね。結局、東京でやっている野外展を沖縄でもやってしまったということですね。でも、沖縄の人にもっと積極的に取り組んでほしかったというのも本音です。意見もドシドシ出してほしかった。

次回からは、情報とか東京でやれるも

のは東京でやり、沖縄でやる根回しは沖縄の人にやってもらうという方法をもちこむ必要がありますね。この企画は、交流展の2回目として東京でも、ぜひやりたいとおもいます。

GV 沖縄でも東京でも、お互いの交流を図りながらドンドン、今回のような展示会が続けばいいとおもいます。これからも、頑張ってください。どうも、今日はありがとうございました。(おわり)

WANTED!

あなたの広告を待っています。

本紙ザ・ギャラリーボイス ☎0988(34)6760

GALLERY WORK-II

2-2-4 IZUMIZAKI NAHA
OKINAWA JAPAN 〒900
Phone 098(855)7933

チャリーマン

「琉球建築」

慶良間諸島の中に慶留間島がある。王朝時代に唐船の中継地であり進貢船の船頭の家など当時の民家がまだ残っている人口60人程度の小さな島だ。



6年前、友人に家の解体を頼まれ、そこへ初めて訪れた。港に着くと数軒の民家しかなく、珊瑚石の石垣をたどってゆくとすぐに福木で囲われた彼の家があった。広い敷地の中央に重厚な赤瓦の家が、ひんやりとした空間に映えていた。250年前に建てられた民家で、県の文化指定を受けているものだ。

しかし彼は、その家を解体し宿泊施設をつくらせようと言う。

理由は、文化指定を受けた家は、個人の自由にならず、県の援助もないからと言うものだった。

私は、解体に猛反対し、彼を説得したが、彼は意志を変えなかった。

解体が決まった以上、私には琉球建築が、どういう構造なのか見届ける責任があった。

まず家の間取りは、一、二番座と裏座の正方形で側に台所があった。使用木材は、雨はじの柱をはじめ、ほとんどが、自然木をそのまま使い、主な所はチャージで頭文につくられていた。木造技術も匠で、接合部分は蟻つぎが用いられ、釘が

なんと、一本も使用されていなかった。解体していくにしたがい、つくづく当時のシェーク連の匠な技に感心させられた。

ところで先頃、沖縄最大の木造建築の首里城が完成したが、今一つ喜べないのは、ウチナンチュの手によってそれが創られなかった為だ。悲しい事だ。

今後、私は木と石の文化、琉球建築を

学び、木造建築に対する認識を深めたいと思う。

解体後、りっぱな宿泊施設が完成したのでぜひ来てくれと友人から何度かさそいを受けたが、今だに行っていない。

それは、250年の歴史のある人類の遺産を3日間で破壊した後悔の念からだ。

(長嶺 豊)

「古代メキシコ至宝展で見たもの」

紀元前1200年の発祥から、16世紀スペイン征服に至るまで、現在のメキシコ地帯を中心とした、大帝国と高度の文明を築いた古代の人々。

遠い時間に生きた人々が、これほど造形に対して豊かな感性と力強い生命溢れ



る表現ができるのか、たいへんなおどろきを感じた。

土偶や石像はそれぞれのスタイルで表現され、バリエーション豊かな感性を持っている。

笑う人の像は、細やかな表情を石に刻み、家族を描いた容器は生活の臭いが感じられる。鳥は独特の造形をつくり、ヘビはシンプルな形態と変化し、犬や猫はユーモアまでも感じさせてくれる。

これだけ独創性と豊かな感性を生み出す原動力は何だろうか。

彼らは厳しい大自然で生きる人々の願いや喜び、恐れを自らの生活環境から表現している。まさに美の力強さというものである。

考えてみれば、現代絵画に大きな影響を与えたアフリカ彫刻。ピカソやモジリアーニも彼らのアートに出会わなければ今のアートは存在しない。

この展示会を通して、生活環境が育むアートの素晴らしさと、現代社会へのメッセージとしての無言の力を教えてくれた。同時に、率直に古代に生きた大芸術家達に「感謝」。

(豊平 秀樹)

editor's voice

3日間で幕を閉じた OPEN AIR EXHIBITION '02(若手作家現代美術交流展)は、サラ地の砂浜に、現代アートを置いてみる、と言う沖縄の美術史になかった展示会だった。

自然環境と、どう関係性が持てるか興味深かった。

沖縄が初めてという東京側の作家には気のドクなほど戸惑いがあった事が感じられた。

その点、地の利を生かした地元側の作品は自然と同化するもの、より相対化してしまうもの、作家のコンセプトが解りやすかった。

オープニングには 200人近くの若い美術ファンが集まった。新世代の美術が台頭していることを知らされた。これっきりの展示会と言わず、ぜひ今後もこの種の交流展を続けて欲しい。

(上)

Adlib 広告制作事務所
アドリヴ
〒901-21 浦添市宇勢理客527 ☎0988(77)6535



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市泉崎2-2-3 ☎098(834-576)